

11. 競い合う神々…『トロヤ戦記』

Crónica Troyana (1400 年頃)

「一日しかスペインにいらなければ Toledo に行け」という勧めを何度か耳にしたことがある。たしかに古都 Toledo は魅力的だが移動時間を考えると難しい。Toledo にはゆっくりと時間をかけて訪れたい。本当に一日しかなければ Madrid を見るべきだと思う。早朝の Retiro 公園で運動をしている人たちを見ながら Prado 美術館の開館時間を待つ、午前中ゆっくり美術品と共に過ごした後、Plaza Mayor の周辺で昼食をとる、午後は Gran Vía から Plaza de España に至り Cervantes と Don Quijote y Sancho Panza の像を見る、夕刻は Palacio Real から Parque de Oeste に広がる日没の景色を眺める、という徒歩のコースは何度辿っても飽きない。夜に時間の余裕があれば Puerta del Sol 界隈の喧騒に飲み込まれるのもよいだろう。

Madrid を散歩すると古代の神々に出会う。Retiro 公園の正門に面する Alcalá 通りと Paseo del Prado が交差するロータリーに小アジアの大地の女神 Cibele の噴水がある(【写真-11a】)。また南に下るとローマの海神 Neptuno の噴水にぶつかる(【写真-11b】)。その斜め前が Prado 美術館だ。Paseo del Prado は 500m ほどの短い通りであるが、緑陰に囲まれた絶好の散歩道 (paseo) である。



【写真 11a】 Cibele

●美を競う

Prado 美術館に入れば古代ギリシャ・ローマ神話をテーマにした多くの有名な美術品が鑑賞できる。たとえばルーベンス (Peter Paul Rubens) の「パリスの審判」El Juicio de Paris (1638 年) や「三美神」Las Tres Gracias (1636 年) は図版などで見慣れた作品だが、実物に勝るものはない。美術館の各所でわき起こる歓声を聞くと、世界に一つしか存在しない作品に対面した興奮が伝わってくる。

晦渋な古代神話の世界をやさしく解説してくれるThomas Bulfinchの*The Age of Fable* (1855年)はトロヤ戦争の発端について次のように述べている。「アテナは智慧の女神でありましたが、ある時ひどくばからしいことをしました。彼女は美を我が手にしめようとしてヘラやアプロディテと競争したのであります。」(野上弥生子訳『ギリシャ・ローマ神話』岩波文庫)。確かに三女神(Rubensの描いた*Las Tres Gracias*)が美貌を競い合うなどということは「ばからしいこと」に違いない。神や人には他に代え難い固有の価値があるのだから、それを競ったり比較したりするのは愚かなことだ。その



【写真 11b】 Neptuno

審判をさせられたのがRubensの絵にもあるパリスで、彼はアプロディテが出した交換条件に惑わされ、彼女に賞(林檎)を与えてしまう。その報酬として彼女の援助によりメネラオスの妻ヘレネを奪い、故郷のトロヤに連れて帰った。それに腹を立てたメネラオスとその兄アガメムノンはギリシャの大軍を率いてトロヤを攻撃する。戦いは長期に及び、最後は大勢のギリシア兵が潜む木馬が城内に引き入れられ、彼らの働きでトロヤは陥落した。以上がよく知られている「トロヤ戦争」の経緯である¹。

ここで取り上げるのは 1400 年頃にラテン語から翻訳された中世スペイン語のテキストで、トロヤの姫カサンドラがパリスとヘレネの結婚に反対し不吉な予言をする場面である²。

(1)

E lo qual vjnjendo a notiçia de Casandra, fija del rrey Prjamo, en commo Paris avia tomado por su muger a Elena, Casandra començó el **esquiwo clamor e agras e dolorosas bozes**, gritando e diciendo en **sentibles lloros e amargo sentjmjento**: "E para que, **malaventurados troyanos**, vos daes a plazeres e alegrias por las bodas de Paris?, por causa de las bodas de las quales tantos males e daños uos son por venjr; e

¹ cf. 高津春繁(1960)『ギリシャ・ローマ神話辞典』「トロイア戦争」「カッサンドラ」の項。

² テキストはGonzález Ollé, 1980による。

por las quales lloraredes uestras muertes e de vuestros hijos, los quales ante los padres veredes agramente padesçer **cruels muertes...**

【語句】 **lo qual** > **lo cual** そのこと (パリスがヘレネと結婚すること) **notiçia** = conocimiento (...の[de])知るところ **esquiuo** = terrible 恐ろしい **clamor** = grito 叫び **agro** = desagradable, áspero, desabrido 耳障りな **sentibles** > **sensible** 悲痛な **uos son por venjr** = os llegarán そなたたちのところへやって来ることであろう。

【訳】 パリスがヘレネと結婚するというその知らせがプリアモス王の娘カサンドラに届くと、彼女は恐ろしい叫びと悲痛な声をあげ、悲しそうに泣きながら辛い気持ちで次のように大声で言った。「不幸なトロヤの人々よ、なぜパリスの結婚をそれほどまでに喜び、歓迎するのか。この結婚のために多くの災いと危害がそなたたちに降りかかるだろう。そのためにそなたたち自身と子らの死を泣き悲しむことになろう、その子らは親の目の前で残酷な死を迎えることだろう」

●形容詞の位置

スペイン語では一般に形容詞は名詞の後につく。一方、文章内の太字のように形容詞が名詞の前に来ると特殊な効果を感じられる。ラテン語では「形容詞＋名詞」の語順が普通であった³。逆に「名詞＋形容詞」の語順になると「強調」の意味が込められていた。しかしスペイン語ではこの「強調」の意味が薄れていき、結果として逆に主観的に強調されるときに「形容詞＋名詞」の順になった⁴。興味深いことにラテン語の「形容詞＋名詞」からスペイン語の「名詞＋形容詞」へという語順の変化は、ラテン語の「目的語＋動詞」からスペイン語の「動詞＋目的語」への語順の変化と平行している⁵。この2つの

³ cf. Dangel (1995:113, 2001:154): "On affirme souvent que l'ordre des mots est libre en latin. Pourtant tout dans les habitudes langagières de cette langue prouve le contraire. Il est ainsi établi que l'adjectif qualitatif précède ordinairement le substantif, l'averbe le verbe." cf. 後述の【補説】

⁴ cf. Urrutia Cárdenas et al. (1988:83-86): "En latín clásico lo normal era la anteposición del atributivo al nombre, adquiriendo el adjetivo un carácter enfático en el orden inverso."

⁵ cf. Cano Aguilar (1988:132-133): "El orden latino adjetivo + sustantivo (con excepciones bien delimitadas fue sustituido progresivamente en época tardía por el de sustantivo + adjetivo, al irse perdiendo, por el uso, el valor expresivo que en época clásica se asociaba a este último orden, y al irse generalizando la secuencia lineal de Núcleo + Complemento (cfr. el cambio Objeto + Verbo > Verbo + Objeto). De ahí que en romance el adjetivo antepuesto al nombre sea el que presenta especiales valores significativos".

変化は互いに関係があるのだろうか。偶然の一致でなければ共通の原因を探さなければならぬ。

目を転じて歴史的に関係のない日本語とスペイン語を比較すると次のように様々なケースで語順が逆になっていることがわかる。

	日本語	スペイン語
名詞句	大きな <u>本</u>	<u>libro</u> - grande
動詞句	本を <u>読む</u>	<u>leer</u> - un libro
助動詞	読ま <u>せる</u>	<u>hacer</u> - leer
副詞句	駅 <u>で</u>	<u>en</u> - la estación
副詞節	雨が降った <u>とき</u>	<u>cuando</u> - llovió
従属節	彼が来る <u>と</u> (言う)	(dice) <u>que</u> - viene

これも単なる偶然(の不一致)だとは思われない。上の下線部を「軸」とすると日本語では軸が後にあり、スペイン語では軸が前にあるという一般化ができる。その軸(たとえば名詞)が数学の定数だとすると軸以外(たとえば形容詞)が変数になる。反対に本文の太字のような「形容詞+名詞」の語順ではこの原則とは異なるので形容詞は変数にならない。そこで、たとえば *esquivo clamor*「恐ろしい叫び声」の *esquivo* という形容詞は他の形容詞から客観的に区別して(変数として)名詞を限定するのではなく、(名詞に固有な定数として)主観的に名詞 *clamor* を修飾することになる。

【補説】

先述(注 2)のようにDangelは「ふつう性質形容詞に係る実詞に先行」すると明言している。さらに、「この配置法は非常に慣用化しており、クィンティリアーヌス(QUINT, IO, IX, 4,26)がその過剰適用を戒め、将来の弁論家たちに、単調に陥らぬよう、かかる機械的自動化を断ち切るように促しているほどである。しかし、ラテン語使用者が、語順を厳密に遵守し、絶対的な規範に従う感性をもっているからこそ、その遵守事項に対するあらゆる変更が、表現上の逸脱として認知されているのである」と述べている。一方、日本で発行されているラテン語の参考書の多くは名詞+形容詞の語順の方が普通であると述べている⁶。

⁶ cf. 泉井 (1952:25), 呉 (1952:36), 樋口・藤井 (1963:20), 松平・国原 (1968:35), 大西 (1997:75), 風間 (1998:164)。英語圏でもGavin Betts (1998:3)は次のように説明

実例を見よう。たとえばカエサルの『ガリア戦記』やキケロの『カティリナ弾劾』、同。『友情論』を読むと、やはり形容詞＋名詞のほうが普通であることがわかる。García Yebra y Escolar Sobrino (1980), Campos Rodríguez (1975), García Yebra (1975)の版で調べるとそれぞれ次のような結果になった。『ガリア戦記』(Gと略す:I-XXX) : 形容詞＋名詞 66 例vs.名詞＋形容詞 15 例 ; 『カティリナへの弾劾』(Cと略す:I-VII) : 44 例vs.3 例 ; 『友情論』(A.と略す:I-X) : 24 例vs. 4 例。例⁷ : *repentino eius adventu* (por la llegada repentina de él, G.XIII), *diuterniorem impunitatem* (impunidad más duradera, G.XIV); *nocturnum praesidium* (guardia nocturna, C.I), *fortes viri* (varones animosos, C.I); *humanosque casus* (vicisitudes humanas, A.II), *in perfecto et spectato viro* (en un varón hecho y probado, A.II), *adversis rebus* (por las cosas adversas, A.X). 次は「名詞＋形容詞」のわずかな例の中から抽出したものである。*homines bellicosos* (hombres bellicosos, G.X), *locis pattentibus maximeque frumentariis* (lugares abiertos y muy trigueros, G.X), *viri fortes* (hombres animosos, C.I), *conatus tuos nefarios* (tus intentos nfarios, C.V).

●競争が招く悲劇

神話や物語で予言が行われると必ずと言ってよいほどそれが実現する。ここでもカサンドラの予言通りに女神たちの愚かな競い合いが多くの英雄と兵士の命を奪うことになった。神話の中で彼女は他にも正しい予言を繰り返すのだが、悲しいことに一つとして民に聞き入れられたことがない。

現在のCibelesの噴水はMadridのサッカーチームReal Madridが勝利するとファンが集って気勢を上げる場所である。一方、対抗するAtlético de MadridチームはNeptunoの噴水に押し寄せる。どちらも熱狂の渦の中ではめを外し、ファン同志の争いや神々の像を破壊するという暴力行為におよぶこともある。スポーツに限らずどのような

している。"Adjectives when used attributively generally comes after their noun: **Brutus nobilis**, the noble Brutus". 一方、大村(1963:22)はattributiveの形容詞は名詞の前に置かれる、と述べている。デル・コラル(1950:19)は「ラテン語では修飾語なる形容詞はそのかかっている名詞の前に(日本語のように)置くのは美しいと云われているが、その後には置くことも多くある。故に自由に前にも後にも置いてよいわけである」という。次のSmith(1938:23-24)も同様に「前後どちらでもよい」という : "Adjectives in Latin come either before or after the nouns they qualify".

⁷ *populi Romani, rei publicae*などの成句は除く。また、たとえ含めても形容詞＋名詞の語順の方が多い。

競争でも勝つことだけを求めて目がくらむと悲しい結果を招くことにもなりかねない。カサンドラの予言が的中したように。

■課題テキスト

トロヤ物語のテーマは中世ヨーロッパ各国の文学に見られるが、イベリア半島に伝わったものは原典『イリアッド』(La Ilíada) から離れてかなり自由な筋書きとなっている。ここに取り上げる二つのテキストは、パリスとヘレネーの結婚に不吉なものと感じとったトロヤの女性占い師カサンドラの悲痛な予言と(1,2), ギリシアの戦士アキレウスの獅子奮迅ぶりを描いたものである(3~6)。

(1)

(前掲)

(2)

O gente çiega, que non vedes njn conoçedes la cruel muerte que vos es por venjr! Por que non fazedes por qualquier via que sea, o siquiera por fuerça, que Helena sea quitada e partida de Paris su non deuido e jnjusto marido? Non trabaiades, con quanta quexa e pesa podedes, a que sea rrestituyda a su legjtjmo marido antes que la cruel espada se esfuerçe e venga en estrago e fjal destruyçion de todos vosotros? Pensaes por aventura quel furto e rrobo de Paris deua pasar sjn graue pena e cruel vengança, por la qual es por venjr fjal perdiçion e muerte? (121)

【語句】 **por aventura** = quizás, por casualidad, acaso ひょっとして。

(3)

Grand mortandad se faze e muchos caen de los griegos, pero mas caen de sus enemigos. E caso que de la parte de los griegos oviese asaz caualleros e gentiles omnes e de grand esfuerço e ardjmento e bien valientes por sus personas, enpero a grand pena podian rresistir a la puxança e poderio de sus enemjgos, los quales bien eran tres tantos que ellos.

【語句】 **caso que** = en caso de queの場合は, ...の場合でも(接続法が用いられているので「逆接」の意味となる) **asaz** = bastantes, muchos 多くの **gentil omne** = noble 貴族 **esfuerço** = ánimo, vigor 勇気 **bien** = muy とても (cf. 現代ラテンアメリカの用法) **ardimiento** = valor, denuedo 勇気, 勇ましさ **enpero** = sin embargo しかし **tres tantos que** = tres veces más que ...…の三倍

* 時制: 戦闘場面を活写するため所々に現在形が用いられている。

(4)

E verdaderamente los griegos fueran ende muertos cruelmente todos quantos ende eran si non fuera aquel maraujlloso cauallero en armas, Archiles, el qual con mucho estudio penso en el grand numero de sus enemjgos e sus fuerças e contenplando en ellos e mjrandolos a todas partes, vido andar al rey Theutran en medio de los suyos, el qual contra los griegos fazia muy grand estrago.

【語句】 **ende** = ahí, allí そこに, あそこに **fuera**, ser = estuviera, estar **estudio** = empeño, ahinco, aplicación 努力 **vido** (強変化) > vio (弱変化) **estrago** = daño 損害。

(5)

Por lo qual el mesmo Archiles se mete con mucha furia por medio de las batallas destraçando e ronpiendo e matando a diestro e sjnjestro por donde quier que alcançaua, faziendo el mortal estrago en sus enemjgos, non perdonando a vida a quantos delante de sy falla e le ocupauan la via quel fazia derechamente por llegar al rey Theutran.

【語句】 **batalla** = escuadrón 隊形, 隊列 **destraçar** > destrozar 破壊する。

(6)

Asi que Archiles, commo el leon quando brama, vjno poderosamente al rey Theutran e cometelo en su gran fuerça dandole muchos e muy fieros golpes de espada, firiendo grauemente, tanto que le desenlaço el yelmo. E despues tomo el

rey por fuerza e derribolo de la silla a tierra. E, commo el rey **fuese** ya caydo en tierra, Archiles, engendido en furia, alço el braço con la espada por lo ferir cruelmente e lo traer a muerte.

【語句】 **cometer** > acometer, embestir 襲いかかる, 攻撃する **fiero** = extraordinario 途方もない

●commo の節内の接続法

commo el rey **fuese** ya caydo en tierra, (...) ラテン語では「原因, 理由, 譲歩」を示すcumの後では接続法が用いられた⁸。

- Cum **sis** mortalis, quae sunt mortalia, cura! (Puesto que eres mortal, cuidate de las cosas mortales.)
- Difficile non est, cum tantum equitatu **valeamus**. 「われわれの騎兵がそんなに強力なので, そのことは難しくない」
- Nihil me adiuvit cum **posset**. (キケロ)「出来たのに少しも私を助けてくれなかった」

中世や古典期スペイン語でも「原因, 理由」を示すcomo (commo)の後で接続法が使用されている(直説法も用いられた)⁹。

- Qual, como el fijo **sea** en poder del padre, ninguna cosa non puede destinar ni dar. (*El fuero de Teruel*, ca. 1250, 447,2)
- Y como **sea** natural a estos no fazer lo que prometen, escusase como en el processo parece. (*Celestina*, 269, 6)
- Y, como me viesse de buen ingenio, holgauase mucho. (*Lazarillo*, 78,5).
- Et commo **es** ella muy falaguera, en poco tiempo fueron todos muy pagados della. (*Lucanor*, 112, 14).
- Pero como **soy** cierto de tu limpieza de sangre y hechos, me estoy remirando si soy yo Calisto. (*Celestina*, 211, 29)

⁸ Bosh, *Sintaxis Latina*, p.180. 樋口他『詳解ラテン文法』研究社, p.92.

⁹ Frede Jensen y Thomas Lathrop. *The Syntax of the Old Spanish Subjunctive*, Mouton, p.69.

これらの古いスペイン語の用法はラテン語の用法を真似たものと考えられる。これを「ラテン語法」(latinismo)と呼ぶ。また「トロヤ物語」のような翻訳文学にも多い。現代語でも接続法過去形が使用されることがある。一方、接続法現在形は非常に稀である。

- Como **fuesen** muy pocos, tuvieron que rendirse. (Esbozo, p.549)
- Como **viniese** cansado, se acostó. (María Moliner, s.v. *como*, p.684)
- Como **sea** la vida milicia, es menester vivir armados. (id.)

【課題 11a】 テキスト(2)~(6)を訳しなさい。訳しながら気づいたことを述べなさい。

【課題 11b】 形容詞と名詞の語順について日本語とラテン語と現代スペイン語を比較し、気づいたことを述べなさい。

【課題 11c】 中世スペイン語の作品を1つ選び、その中で *como* 節の中の直説法と接続法の分布を調べなさい。

【参考文献】

- Betts, Gavin. 1998. *Latin, a complete course*. London. Teach Yourself Books
- Campos Rodríguez, Francisco. 1975. *M.T.Cicerón. Catilnarias*. Madrid. Gredos.
- Cano Aguilar, Rafael. 1988. *El español a través de los tiempos*. Madrid. Arco / Libros.
- Dangel, Jacqueline. 1995. *Histoire de la langue latine*. Presses Universitaires d France, Collection QUE SAIS-JE? 遠山一郎・高田大介訳 2001 『ラテン語の歴史』 白水社。p.154.
- デル・コラル。 1950. 『ラテン語四ヶ年』 ドン・ボスコ社
- García Yebra, Valentín. 1975. *M.T.Cicerón. De amicitia*. Madrid. Gredos.
- García Yebra, Valentín e Hipólito Escolar Sobrino. 1980. *César, Guerra de las Galias. Libros I-II-III*. Madrid. Gredos.
- Gavin Betts, *Teach yourself Latin*. Hodder & Stoughton
- González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.
- 樋口勝彦・藤井昇。 1963. 『詳解ラテン文法』 研究社
- 泉井久之助。 1952. 『ラテン広文典』 白水社
- 風間喜代三。 1998. 『ラテン語とギリシャ語』 三省堂

- 呉茂一. 1952. 『ラテン語入門』 岩波書店
- 松平千秋・国原吉之助. 1968. 『新ラテン文法』 南江堂
- 大村雄治. 1963. 『大村実習ラテン語』 白水社
- 大西英文. 1997. 『はじめてのラテン語』 講談社
- Smith, F. Kinchin. 1938. *Latin*, London. Teach Yourself Books
- Urrutia Cárdenas, Hernán y Manuela Álvarez Álvarez. 1988. *Esquema de morfosintaxis histórica del español*. Bilbao: Universidad de Deusto.

FIN